

上智大学アメリカ・カナダ研究所編
『北米研究入門—「ナショナル」を問い直す』
上智大学新書、上智大学出版、2015年

古地 順一郎
KOJI Junichiro

本書は、1987年の創設以来、約30年にわたってアメリカ・カナダ研究の発展に取り組んできた上智大学アメリカ・カナダ研究所が、「北米」というキーワードを手掛かりにアメリカ・カナダ研究の新たな地平を開こうとする意欲的な1冊である。副題に『「ナショナル」を問い直す』とあるように、アメリカやカナダといった「国民国家」を分析単位とする従来の方法論に疑義を唱え、両国をひとつの地域と捉えることで、北米地域の特色を明らかにすることを目指している。

本書は3部10章と3つコラムから構成され、11名全ての執筆者が、上智大学で教鞭を取るアメリカ・カナダ研究所員という布陣である。また、本書は上智大学新書シリーズに収められていることから、同研究所における最先端の論考が手に取りやすい形で提供されていると言えよう。

第1部は「北米の歴史と価値意識」と題され、歴史、地理、宗教、文学といった視座から北米の特色を捉えようとしている。第1章では、編集代表者である小塩和人が、米加2国間の比較研究を越えた、広域地域研究としての北米研究を提唱する。まず、米国とカナダが歴史的に大西洋を向いてきたことを指摘し、西ヨーロッパとの強い関係を北米の特徴としている。一方で、シーモア・M・リップセット (Seymour M. Lipset) の研究等に言及しながら、米加両国に見られる革命の有無や英系住民と仏系住民の共存の必要性の有無、英国との関係の違い、公有地のあり方を通じた政府の位置づけの違いなどが指摘される。その上で、米加国境をまたぐ人種や民族の関係や、環大西洋や環太平洋といった世界の他地域とのつながりの中での北米、英語以外で行われている研究成果の取り込み等が今後重要になると論じている。

第2章では、増井志津代が、福音主義派のメガチャーチに代表される米国の宗教的特殊性を説明している。カナダでは、ヨーロッパと同じく宗教離れが進んでいるにもかかわらず、米国で福音主義派が増加している理由を歴史的要素に注目しながら明らかにしている。スペインやフランスによる北米で

の布教活動にも触れつつ、米国が改革派プロテスタントにとって宗教改革の理想を実現する場となったことが強調される。米国の国家建設のプロセスにおいて、ミーティングハウスと呼ばれる教会を中心としたまちづくりが行われたことで、教会契約と社会契約が密接に絡み合うこととなった。このような歴史的文脈の中で、民衆的で実践的な信仰としての福音主義がアメリカ市民の間に根付いていったと論じている。

第3章では、大塚寿郎が奴隷に関わる黒人文学であるスレイヴ・ナラティヴを越境文学ととらえ、十分な理解を得るためには米加を一体的にとらえる必要があると唱えている。カナダでは米国に先駆けて奴隷制を廃止したこともあり、米国の黒人奴隷たちにとって、カナダは自由の地として神話化されていたことが示される。このことは、米国の黒人がイギリス国王の庇護を受けることを意味し、同国王による支配からの解放を目指した白人とは正反対のストーリーとなる。また、カナダの神話化によって、カナダにおける黒人差別や、米国での奴隷解放後の黒人婦米促進政策の存在がかき消されることになったことも指摘される。さらに、想像としてのカナダに注目が集まったことで、メキシコに逃れた奴隷たちに光が当たらないという偏りが見られた。大塚によれば、このような現象は米国のみを見ては分からず、カナダとメキシコを加えた越境文学として見ることで可能になるとしている。

第4章では、小川公代が、カナダを代表する作家であるマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) の作品に注目し、「サバイバル」という概念を中心としたカナダ文学の特徴を明らかにしている。カナダという場所の重要性、とりわけ、畏怖の対象としての自然との関係、絶え間なく押し寄せる外国文化 (イギリス、フランス、アメリカ) の脅威の中で、カナダらしさを維持しようとする「主体の静かな闘争」(p.114) としてカナダの価値観が説明されている。

第2部は、「多文化主義と北米社会」と題され、様々な社会的多様性を切り口として北米の特徴が明らかにされている。第5章では、伊達聖伸が、北米のフランス語社会であるケベックに焦点を当てている。伊達は、英語が多数派を占める北米でのケベックの歴史を「サバイバル」という言葉で表現している (p.119)。さらに、ルイ・エモン (Louis Émond) の小説を読み解きながら、ケベックという土地とケベック人のアイデンティティが深くつながっていることが示される。サバイバルや土地への想いは、アトウッドの考え方にも通じるところがあり、いわゆる「入れ子の構造」が存在していることが

分かる。さらに、このようなサバイバルの精神性が、ナショナリズムの存在や、間文化主義（インターカルチュラルリズム）と呼ばれる、カナダの多文化主義とは異なる多文化共生モデルを提唱することにもつながっているとされる。マイノリティとしての存在が、「時代の一步先を行く社会」（p.120）の実現を可能にしているとの指摘も興味深い。

第6章では、石井紀子が、米加女性史の比較を通して、ジェンダーの視点から北米社会を分析する意義を明らかにしている。米加両国における女性の権利確立に向けた運動は、それぞれの国情に応じて行われたことが指摘される。つまり、米国では人種問題と強く結びつく形で展開されたが、カナダでは、宗主国であるイギリスとの関係や、米国との地理的接近性が大きな意味を持つとされる。また、米国では、民主主義の成熟という文脈で議論されてきたが、カナダでは国としての独自性を追求するナショナリズムの文脈で発展するとともに、エリートが女性運動をけん引した。ジェンダーの視点を取り入れることで、新たな問いを探ることができるとしている。

第7章では、出口真紀子が、北米における「白人性（ホワイトネス）」を、米国の事例を中心に心理学の側面から論じている。出口によれば、米国で白人であることの特権は、自分が白人であるということを考える必要がないことだとされる。このことによって、自分たちが社会において支配的な立場であることが認識できず、有色人種が置かれている立場を理解できないという状況が生まれる。逆に社会的弱者になる場合が多い有色人種は、白人ではないことに伴う差別や抑圧を意識するなど、否定的な部分からアイデンティティ形成が行われている。そのため、弱者の方が現実の社会構造を理解していることが多いことが指摘される。

第8章では、飯野友幸が、ブルースという音楽形式の成立過程の分析を通じて、「ブルース＝黒人固有の音楽」といった固定観念を問題化することの意義を論じている。奴隷制度下での労苦を和らげるための歌として始まったブルースは、コール・アンド・レスポンスと呼ばれる、呼びかけ側と応答側による歌の応酬を特徴とし、ブルースに特有のものとされているが、日本のソーラン節にもそのような構造が見られるとし、集団歌に共通の特徴ではないかと疑義が出されている。さらに、教会の西洋音楽との融合や、楽譜化、都市での発展など、様々な音楽との混交が進んでいることが示され、「真正さ（オーセンティシティ）」を黒人にもみ求めることが難しくなっているとされる。にもかかわらず、黒人とブルースを結び付けようとする固定観念が、

ブルースの実態をゆがめることにつながっていると指摘されている。

第3部は、「世界の中の北米」と題され、世界とのつながりの中で北米地域を考える視座が提供されている。第9章では、飯島真理子が、第2次世界大戦前の米国本土、ハワイ、カナダへの日本人移民の歴史を比較し、その類似点と相違点から、日本人移民と北米地域の関係を考えようとしている。例えば、米国における日本人移民の処遇は日米関係に影響を与えたが、カナダの場合、日加関係に加えて日英関係も視野に入れる必要がある。また、日本人移民の人数が多く、割合も高かったハワイでは戦時中もそれほど厳しい処遇が行われないなど、移住先における日本人移民の多少によっても処遇が異なったことが指摘された。共通点としては、受け入れ国も移住者も当初は短期的な労働目的でしか見ていなかったが、定住するにつれて両者間の軋轢が高まったことが挙げられた。

第10章では、前嶋和弘が、アメリカの政治・外交を「自由と民主政治」という観点から分析している。前嶋によれば、アメリカには建国以来、現在に至るまで「圧政や束縛からの自由」(p.265)という理念が脈々と続いているとされる。そのことが、普通の市民が政治を行うデモクラシーの発展や、徹底した権力分散につながっていると指摘する。一方で、前嶋は2つの「自由」という理念が、現代アメリカの政治で競合関係にあるとも分析している。それは、福祉国家の成立において重視されたりベラルな「抑圧・貧困からの自由」(p.286)と、福祉国家の肥大化に異議を唱え、個人の自由を重視するリバタリアン的な「肥大化した政府からの自由」(p.286)である。

各章の要約に見られるように、本書では、多様な学問分野からのアプローチが試みられており、北米の特色をとらえる上での豊かな視座が提供されている。これまで、米国研究やカナダ研究など、いわゆる「一国研究」を行ってきた研究者にとっては、新たな気づきをもたらしてくれる。また、構築主義の立場を取って「ナショナルなもの」の形成過程に注目しようとする試みも示唆に富む。

一方、一部の章では米国あるいはカナダの事例に絞ったものもあり、北米を「1つの地域」として捉えるという本書の問題意識との関係が分かりにくい部分があった。執筆者の専門性を考えると贅沢な希望かもしれないが、本書の最後に、各章の議論を踏まえて北米研究へのアプローチや視座について改めて整理する章があれば、なお読者にとっては有用だったかもしれない。にもかかわらず、米国研究、カナダ研究を越えた北米研究のあり方を考える

上では欠かせない1冊となることは確かであろう。

(こち じゅんいちろう 北海道教育大学函館校 准教授)